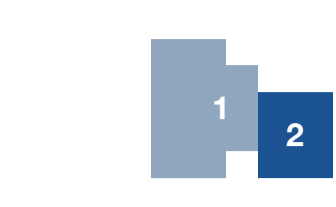




## 緑を絶やさないために 木曽ヒノキがなくなる？

天然木曽ヒノキの美林。樹齢は300年程度と推定されている。



Like 0 | 投稿

注) 木曽の木材業界では、天然木曽ヒノキ材を「木曽檜」、人工的に植栽されたヒノキ材を「きそひのき」とし、それぞれを漢字とひらがなで表記することによって区別して扱っています。本欄では、「木曽檜」材を産出する天然木曽ヒノキ林について言及しています。

### 江戸時代の禁伐政策がもたらした 樹齢300年の美林

今年10月、平成17年6月に伊勢神宮の式年遷宮に使われるご神木が伐採された木曽・赤沢の森を3年ぶりに訪れてきました。林内ではベニマンサクやシロモジが色づき始め、山はこれから一年でもっとも美しい時期を迎えようとしていました。そして森の奥、「千本立ち」や「奥千本」と名付けられた天然木曽ヒノキの林では、胸高直径（地表から1m20cmくらいのところの直径）が60cmを超え、樹高も30mに達する樹齢300年のヒノキがまさに林立している姿を見ることができました。これだけのヒノキの大木が1カ所にひしめいているのは木曽、そして岐阜県東濃地方の裏木曽くらいのもので、まっすぐなヒノキの林は、まさに森閑とした空気を醸し出していて、見ているこちらの心持ちも自然と静まってくるような気がしました。

木曽では1500年代から1600年代にかけて木材生産が本格化しました。特に豊臣秀吉や徳川家康の時代には城郭や神社仏閣の建築用材として、それこそ禿山に近い状態になるまで伐採が進んだと推定されています。現在のヒノキ林はその跡地にもたらされた種が発芽し、長い時間をかけて育ってきたものだと言われています。ですので、大きなものの樹齢はだいたい300年くらいで共通していて、最高で400年程度まで。それ以上のものはありません。

木曽で現在のような美林が形成されたのは、江戸時代に尾張藩が厳しい山林保護政策を敷いたことに由来しています。1665年（寛文5年）に設けられた巢山・留山制度では、鷹狩用の鷹を保護する目的で山林への立ち入りが禁止（巢山）されるとともに、山林資源を保護するために伐採が禁止（留山）されました。さらに1707年（宝永5年）にはヒノキ、サワラ、コウヤマキ、アスナロの4樹種が禁伐になり、その後ネズコもこれに加えられました。これら5種類の「停止木（ちょうじぼく）」がいわゆる「木曽五木」です。当時は「ヒノキ1本、首ひとつ」といわれるほど、留山の禁伐が厳格に運用されたといえます。こうした厳しい保護政策によって、木曽ヒノキの美林がもたらされたわけです。

### 将来は「木曽アスナロ」の森になる？

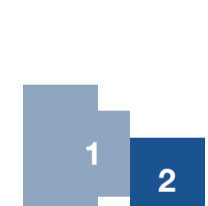
このように大切に守られてきた木曽ヒノキですが、戦後の復興時や高度経済成長期に盛んに伐採されたことや昭和39年にこの地を襲った伊勢湾台風による風倒被害などによって、資源量は激減しています。青森ヒバ、秋田スギと並んで日本三大美林と称され、建築用材としては最高級品に位置づけられる木曽ヒノキもそう遠くない将来、一部の保護林を除いて姿を消すことになるでしょう。それらの保護林もそれぞれの木が寿命を全うすることで失われる運命にあります。

それではヒノキがなくなった後はどうなるのでしょうか。正確に予想することはできませんが、今の状態からすると、木曽五木のひとつであるアスナロの一大群落が形成されるのではないかという見方があります。アスナロは別名をヒバといい、三大美林のひとつ、青森ヒバと同じ仲間です。この木はごくわずかしかが光が入らないところでも育つことができる「陰樹」で、ヒノキの高木に頭上をさえぎられた地表近くの暗いところで旺盛な成長を示しています。もちろん、周囲のヒノキを母樹とするヒノキの幼木もあるにはあるのですが、成長のために光が必要な「陽樹」であるヒノキは育ちが悪く、アスナロに圧倒されています。

このようなヒノキやアスナロの性質を考えると、もともとこの地で天然ヒノキ林が形成されたのは、秀吉や家康の時代の強度伐採で林内にあまねく日差しが注がれるようになったからだと考えすることもできます。それらのヒノキが成長し、日差しが葉でさえぎられるようになった結果、ヒノキの成育には適さない環境がもたらされたというのは皮肉な話ですが、これは今に始まったことではなく、かなり前から木曽の山はそのような状態になっていたのかもしれない。というのは、千本立ちや奥千本の森では、そこそこの大きさに育っていてもいいはずのヒノキの後継樹が見当たらないのです。過去には、あるいは現在も、いま立っているヒノキから種が落ちてはいるはずですが、それが育たなかったというのは、早くから将来的にこの地では天然林のヒノキ林がなくなる運命が決定付けられていたのだとも言えるでしょう。そう考えると、江戸時代の禁伐政策が、林業的利用を考慮して適切な抜き伐りに道を開いていれば、ヒノキ林を永続的に循環させる環境を整えることもできたのと思わなくもありません。

アスナロは地表近くで長い年月を耐えた後、上木が伐採されたり自然に倒れたりして陽が差し込むと、ぐいぐいと上に向かって育ち始めます。これから何百年かが経過した後の世では、「木曽ヒバ」が三大美林のひとつに数えられるようになっていくかもしれません。

Like 0 | 投稿



地表近くではアスナロがヒノキの大木（中央後方）を取り囲むように繁茂している。



関連する記事はこちら

- 日本人の暮らしと木
- 山への思いを受け継ぐ
- 緑の日本であり続けるために
- その木のふるさとを知る
- 国産材時代到来か？最新動向を検証

#### 木の家イベントカレンダー

**最近の特集記事**

- 2019年6月15日
  - やさしくて強い、理想の家を求めて：アイ設計研究室 大前泰秀さん
- 2019年5月15日
  - 磨き上げた職人技で、木を生かす：西岡建築一級建築士事務所 西岡健一さん
- 2019年4月20日
  - 大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん
- 2019年4月10日
  - 本物の家づくりを、自由に、楽しんで：株式会社木神楽 高橋一浩さん
- 2019年1月5日
  - 新春特集 2018年のベストショット集
- 2018年12月29日
  - 板倉仮設住宅 移設ものがたり part3 大工の声 & 今後の課題編
- 2018年12月17日
  - 板倉仮設住宅 移設ものがたり part2 実録編
- 2018年12月14日
  - 板倉仮設住宅 移設ものがたり part1 概要編
- 2018年9月4日
  - 番匠 鋸持工務店 副棟梁・鋸持大輔さん
- 2018年8月15日
  - 鶴岡総会予告 その1 散るより、生き延びよ！

#### 人気のある記事

- 冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
- 大工たちによる「家良し」の記録 13件のビュー
- 込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 11件のビュー
- 設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
- 第三回これ木連フォーラム「伝統構法はこれからどこへ向かうのか？」の報告 11件のビュー
- 「職人がつくる木の家」づくりを未来につなげるアンケート 11件のビュー
- 古川 保の熊本市川尻町 震災日誌 11件のビュー
- 伊勢神宮遷宮・御袖始祭り：300年の大木を伐る！ 11件のビュー
- 工務店・西條正幸さん(ピオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり 10件のビュー
- 設計士・川端眞さん(川端建築計画)：小さな石場建ての家 10件のビュー

#### この記事のタグ

日本の山河を守りたい  
日本文化と木の家  
赤堀植雄の林材レポート

#### 同じタグがついた別の記事

- 2006年3月25日 「林業をやる」ってどんなこと？
- 2005年2月25日 緑の日本であり続けるために
- 2009年4月30日 山里の暮らしがなくなる？
- 2010年2月25日 林業が良くなっていくには、何が必要か
- 2011年4月25日 林業・岡崎定勝さん(岡崎製材所)：製材所からはじまる木の家づくり



緑を絶やさないために「みどり絶やさぬお山の掟」

全国各地で植林放棄地が増加している。



Like 0 ポスト

「伐りっぱなし」の山が増えている

前回(2008年5月号)のこの欄でも触れたことですが、最近はいくまで日本の木材市場を席巻していた外国産木材(外材)をめぐる状況が大きく変化し、国産木材(国産材)への注目度が飛躍的に高まってきています。中国やインドといった新興木材消費国が台頭して外国産木材の調達環境が悪化し、さらに日本にとって最大の丸太輸入先であるロシアでは、来年から丸太の輸出を実質的に禁止する措置(丸太輸出に高額の出産税を課す)がとられることになっています。こうした情勢変化を背景に、国内の木材資源が大きく注目されるようになってきているのです。ただ、この状況を手放しで喜ぶわけにはいかないと私は考えています。もちろん、国産材が注目されるというのは悪いわけではなく、沈滞ムードが蔓延していた林業産地では、伐採が活発に行われるようになるでしょうし、そこで働く人々にとって収入の機会が増えることになるのは間違いありません。しかし、そうした伐採行為によって、森林がダメージを受けることになってしまっは元も子もありません。

行政用語としての「造林未済地」の定義は、「伐採が行われた年度の年度末から3年間を経過しても植栽などの更新が完了していない人工林地」です。「更新」とは、伐採後の林地を何らかの方法で再び緑に戻すことをいい、具体的には苗木などを人工的に植えつける「人工更新」と、自然にたもたされた種が発芽する「天然更新」の2種類があります。つまり、伐採後に放っておいても自然に更新されるのであれば、それは「造林未済地」ではないとの解釈が成り立ち、実際に上記のようなデータの運用が行われているわけです。しかし、一般的な感覚では、それも造林放棄すなわち「伐りっぱなし」であることには変わりはありません。将来にわたって林業を経営する意欲をなくしてしまい、目の利益を確保することにのみにとられて行われる伐採行為が増えているという問題が今も深刻化しているという事実から目をそらすことはできません。

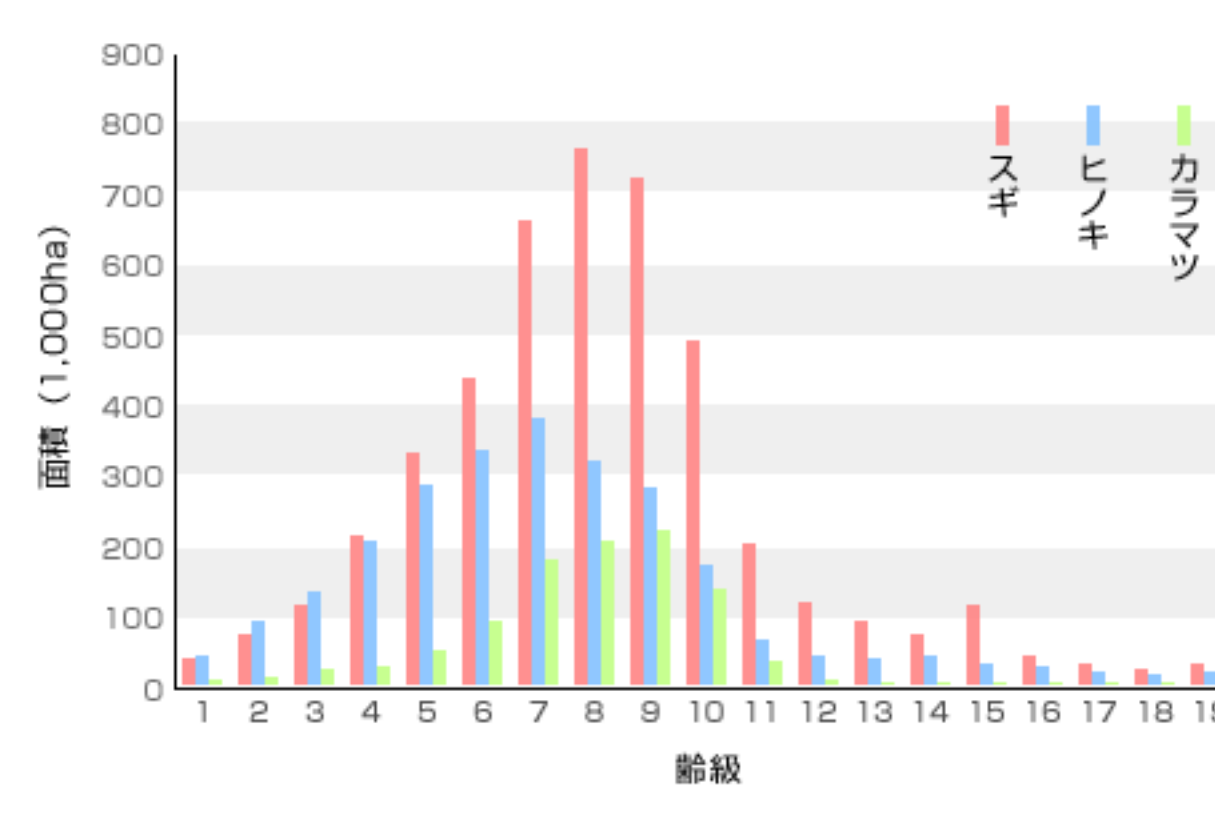


「天然更新」として伐りっぱなしにされた山も、いずれは写真のような雑木林や里山林として回復することが期待されている。しかし、こうした林になるまでは長い年月を要する上に、里山林のような林は適度に人手が入ることによって形成されてきたという経緯がある。暮らしを成り立たせるためには山の資源を利用することが不可欠だった昔と異なり、今の日本で里山林を育て、維持していくためには、何か別の視点で山に入るための理由付けを考えなければならない。「天然更新」で山を再生するのは簡単なことではない。

緑を絶やさぬ知恵と技術を

現在、国内の木材需要は年間8,000万m3程度で、そのうち1,800万m3が国内からの供給によってまかなわれています(材積はいずれも丸太換算)。その一方で、国内の森林資源としては、立木材積で毎年7,000万m3も蓄積量が増加しているとされています。立ち木から丸太への利用割合(立木歩留まり)を6割と仮定すると、わが国の森林では利用可能な材積として毎年6,000万m3ほども資源が増加(7,000万m3×60%+1,800万m3)していて、その3割に当たる1,800万m3を実際に利用している計算になります。このことから、国産材の供給量を今の倍くらいに増やしても資源的にはまったく問題がなく、かなりの供給余力を残しているということがよく言われます。しかし、果たして本当にそうなのでしょうか？

まず蓄積量については、人工林だけでなく、天然林も含むすべての森林を対象にしたデータであるということを考慮する必要があります。さらに、この中には成熟した森もあれば、まだ小さな木しか生えていない未成熟の森もあるわけです。それらがバランスのよい構成になっていれば、成熟した木を伐っても何年後かには次の世代の木を伐ることができ、伐った後には新しい木を植えて育てるといったサイクルを繰り返すことによって、木材を安定して生産し続けることができる理屈になります。しかし、建築用材などに利用される主要アイテムである人工林のスギ、ヒノキ、カラマツについて、年齢別(1年齢は1~5年生、2年齢は6~10年生というように5年ごとに区分する)の面積を調べてみると、いずれも6~10年齢(31~50年生)くらいのところ集中していて、それ以下の年齢では面積がかなり少なくなっています(別表)。例えばスギの場合は8~9年齢の面積がもっとも多いわけですが、それ以下となると、7年齢はそこそこあるものの、6年齢以下はぐんと落ちてしまいます。合板原料として注目されているカラマツも同様で、次の時代を担うべき若い林はあまりないのです。



人工林(スギ、ヒノキ、カラマツ)の樹種別年齢別面積(平成14年3月31日時点、出典:林野庁資料)

このようなデータを見ると、今の日本の森では、単に伐期(一般に人工林の場合は50年生程度)が来たからといって機械的に木材を生産していたら、いずれ資源が枯渇する可能性があることがわかります。今までは国産材の自給率が低く、生産自体が低調だったのでこうしたことは考えなくてもよかったのかもかもしれませんが、これからはそうはいきません。今後、国産材への利用圧力が高まっていくのは必至です。そうした中で、森林にダメージを与えずに安定して木材を利用し続けることができるようにするためには、どうすればいいのか。現在の年齢構成や、再造林放棄地が増え続けている現状を踏まえた実効性のある生産・管理計画を早急に立てる必要があります。

今回、木曾では地元のボランティアグループの方が案内役をつとめてくださいました。その方が森の中を歩きながら「もう20年くらい前に林野庁が一般の方から歌詞を募集し、北島三郎が歌った『年輪』という歌をご存知ですか」と問いかけてきました。その歌には次のような一節があります。

みどり絶やさぬ お山の掟

林業を営み、山の木を利用し続けるには「緑を絶やさぬ」知恵と技術が必要です。木曾の山は資源を残す知恵によって頼まれぬ美林を形成してきましたが、資源を使い続ける技術は講じられて来ませんでした。過去をひもとけば、日本では幾たびか、伐採が行ったためにその後しばらくは資源の培養に努めなければならなかったという経験をしてきています。奈良時代や平安時代に宮殿造営や神社仏閣建築が盛んに行われたとき、秀吉や家康の時代、そして先の大戦中や戦後の復興期もそうです。今またその轍を踏まないために「緑を絶やさず」に利用し続ける知恵と技術を確立する必要があると強く訴えたいと思います。

Like 0 ポスト



この木が育ち、木材として利用できるようになるまでには少なくとも40~50年かかる。そうしたサイクルを見直し、木を適切に利用し続けることができるようになるための知恵と技術が求められている。



日本人の暮らしと木 山への思いを受け継ぐ 緑の日本であり続けるために その木のふるさとを知る 国産材時代到来か？最新動向を検証

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

- 2018年3月27日 伝統建築に携わるすべての職人に光を
- 2018年2月7日 「伝統建築工師の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」ユネスコ無形文化遺産候補選定のおしらせ
- 2018年1月2日 新春特別企画 2017年のベストショット
- 2017年12月14日 第17期木の家ネット総会：倉敷大会 - 林家改修と曳家-
- 2017年10月14日 気候風土適応住宅のチカラができました！
- 2017年9月4日 家のお風呂 こうやって作る、こうやって保つ
- 2017年8月8日 家にお風呂が入るまで
- 2017年6月30日 気候風土適応住宅のスヌ
- 2017年6月3日 掛川総会3
- 2017年5月31日 掛川総会2

人気のある記事

- 冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
- 大工たちによる「家直し」の記録 13件のビュー
- 設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
- 込み栓角ノミ復活！松井鉄工所訪問記 11件のビュー
- 第三回これ木造フォーラム「伝統構法はこれからどこへ向かうのか？」の報告 11件のビュー
- 「職人がつくる木の家」づくりを未来に繋ぎつなげるアンケート 11件のビュー
- 伊勢神宮遷宮・御社始祭：300年の大木を伐る！ 11件のビュー
- 古川 保の熊本市川尻町 震災日記 11件のビュー
- 設計士・川端真さん(川端建築設計画)：小さな石場建ての家 10件のビュー
- 工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條子ザイン)：北海道で無垢の木の家づくり 10件のビュー

この記事のタグ

- 日本の山河を守りたい
- 日本文化と木の家
- 赤堀橋雄の林材レポート

同じタグがついた別の記事

- 2009年4月30日 山里の暮らしがなくなる？
- 2015年11月9日 第14期 木の家ネット総会 岐阜・加子母大会
- 2007年10月31日 無垢の木を使って暮らそうを支える
- 2007年5月25日 日本人の暮らしと木
- 2011年7月2日 山への思いを受け継ぐ

事務所 7111-0906 岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3 児島倉内 mail: jimukyoku@kino-ie.net tel: 086-486-5464

木の家ネットとは つくり手リスト 特集 入会案内 イベントカレンダー 問合せ

地域別つくり手リスト

北海道・東北	関東(東京以外)	甲信越・北陸	東海	関西	中国・四国	九州
北海道	栃木県	新潟県	岐阜県	滋賀県	鳥取県	福岡県
青森県	群馬県	富山県	静岡県	京都府	岡山県	佐賀県
岩手県	埼玉県	石川県	愛知県	大阪府	広島県	長崎県
宮城県	千葉県	福井県	三重県	兵庫県	山口県	熊本県
秋田県	神奈川県	山梨県		奈良県	徳島県	大分県
山形県	関東(東京都)	長野県		和歌山県	香川県	
					愛媛県	
					高知県	